や大きさを競ういわゆる標具の風流化がはじまる。享保年間に至りかなり風流化が進行していたであろうことの反映が、右に述べたこれを禁ずるふれ書きとなってあらわれたといえよう」と論じて、享保年間にたびたび出された禁制（触書）に触れている。

（注26）守屋毅『中世芸能の幻像』（服飾に見る傾奇―風流―）

（注27）鶴舞図書館蔵

（注28）鶴舞図書館蔵（水野正信著）

（注29）郡司正勝『風流の図像誌』（「造る」と「見立てる」）

（注30）小寺玉晁『見世物雑志』（郡司正勝・関山和夫編）

（注31）朝倉無聲『見世物研究』に付された守屋毅による解題。延広真治「見世物興行・大道芸」（国文学研究資料館講演集七）

（注32）朝倉無聲『見世物研究』（伎術篇「舞踊」）

（注33）中村幸彦「大阪俄について」（著作集第十巻『舌耕文学談』）肥田皓三「大阪の俄」（『上方風雅信』）西角井正大『祭礼と風流』（五祭礼にわか）朝倉無聲『見世物研究』（伎術篇「狂言」）

（注34）朝倉前掲書(32)（細工篇）

（注35）尾崎久弥『どどいつぶし根元集』所収（「熱田遊里沿革略」）

あげて記述している。とりわけ尾張旭市教育委員会編『馬の塔』は、〈風流〉の視野に欠けるものの、この祭礼民俗を総合的に捉えようとするすぐれた仕事である。さらに愛知県『日進町誌』〈資料編六〉は、江戸後期から大正に至る馬の頭の記録を収録する。今後、このような資料の蒐集と整理が急務であろう。

(注4) 『猿猴庵日記』は名古屋叢書（第十七巻）・名古屋叢書三編（十四巻・金明録）・日本庶民生活史料集成（九巻）・日本都市史料生活史料集成（四巻）に収録されているものを用いた。『尾張年中行事絵抄』も名古屋叢書三編（五・六・七巻）に影印翻刻されている。なお『蓬左見聞雑著』（鶴舞図書館蔵）も参照した。

(注5) 名古屋市博物館編『部門展　馬の塔と棒の手』

(注6) 棒の手（棒術）伝承は印地と関わる課題が存するので、別の機会に論じたい。

(注7) 尾張旭市教育委員会編『馬の塔』（第一部第一章「馬の塔・棒の手発祥説話」）

(注8) 尾張旭市教育委員会編『馬の塔』は、「走り馬（競べ馬）の勝馬が、飾り馬として神幸の列に加わるという、かつて熱田神宮などで見られたものが『馬の塔』の起源である」と述べる。

(注9) 柳田國男「年占の二種」（『定本　柳田國男集』第十三巻）

(注10) 小島瓔禮編著『人・他界・馬』（第五章「神々の馬」）岩井宏美『絵馬』（叢書・ものと人間の文化史）

(注11) 田中青樹「愛知の祭礼習俗　馬の塔の諸相」（名古屋市博物館・研究紀要　第六巻）

(注12) 馬の頭と雨乞習俗の関連については、加藤参郎氏に「尾張古村における一祭礼習俗」（『日本民俗学』三十一）なる論考が備わる。

(注13) 『熱田祭奠年中行事図会』（熱田神宮史料所収）は、熱田馬の頭会の条で、「ヨシヤレヤヨシヤレサハラハヒヤセ」と囃して行列する旨を記している。

(注14) 高谷重夫『雨乞習俗の研究』（第一章第一節「古代の雨乞」）

(注15) 春日井市坂下では、雨乞祈願の折に、雷神・竜神の作り物を乗せた馬の頭を、内津神社・金神社に献じたという。その際の雨乞い唄が『春日井市史』に所収されている（小木曾正明「小金と竜神」（名古屋郷土文化会発行「郷土文化」第四十七巻第三号）参照）。この雨乞い唄は竜神信仰と五穀豊穣の祈願との結びつきを語って興味深い。以下の論ともかかわるので掲げておく。

〈ここがお金か　お金の沢か　竜が水吐くおもしろや〉〈西に立つ雲乾にゃ夕立　やがて降り来る　村雨が〉〈この家おせとの　大榎木小金花咲く　銭がなる　もとの梢にゃ　金がなる〉

〈小金咲く〉という詞は、稲の稔りを期待するものであろう。米を〈金花（こがねばな）〉と見立てる発想は、近世狂歌にもしばしば見られる。

(注16) 神道大系〈熱田神宮〉篇所収

(注17) 柳田國男『山島民譚集』（定本二十七巻）石田英一郎『新版河童駒引考』（全集五巻）小島瓔禮編『人・他界・馬』（第七章「馬と豊饒の女神」）

(注18) 『熱田祭奠年中行事故実考』も、「古伝日本武尊東征之御鞍也」と記す。そして馬の頭の起源もまた、この日本武尊の東夷伝説と結びつけて語られるのである。（尾張旭市教育委員会編『馬の塔』）

(注19) 尾張旭市教育委員会編前掲書(3)（第五章「大須馬の塔と四観音馬の塔」）

(注20) 名古屋叢書三編（八巻）。

(注21) 高谷重夫前掲書(14)（第四章第四節「雨壺考」）

(注22) 尾張旭市教育委員会編前掲書(3)（第七章「大森合宿」）名古屋博物館図録『馬の塔と棒の手』（Ⅳ龍泉寺と馬の塔）

(注23) 柳田國男「杓子・柄杓及び瓢箪」（定本第四巻）石上堅『日本民俗語大辞典』（〈瓢（ひさご）〉の項）

(注24) 西角井正大『祭礼と風流』（三、山車風流〈からくり人形〉）

(注25) 標具の風流化がいつごろからはじまったかも問題になる。前掲『馬の塔』は、「近世の初頭には簡素な標具であったものがやがて形

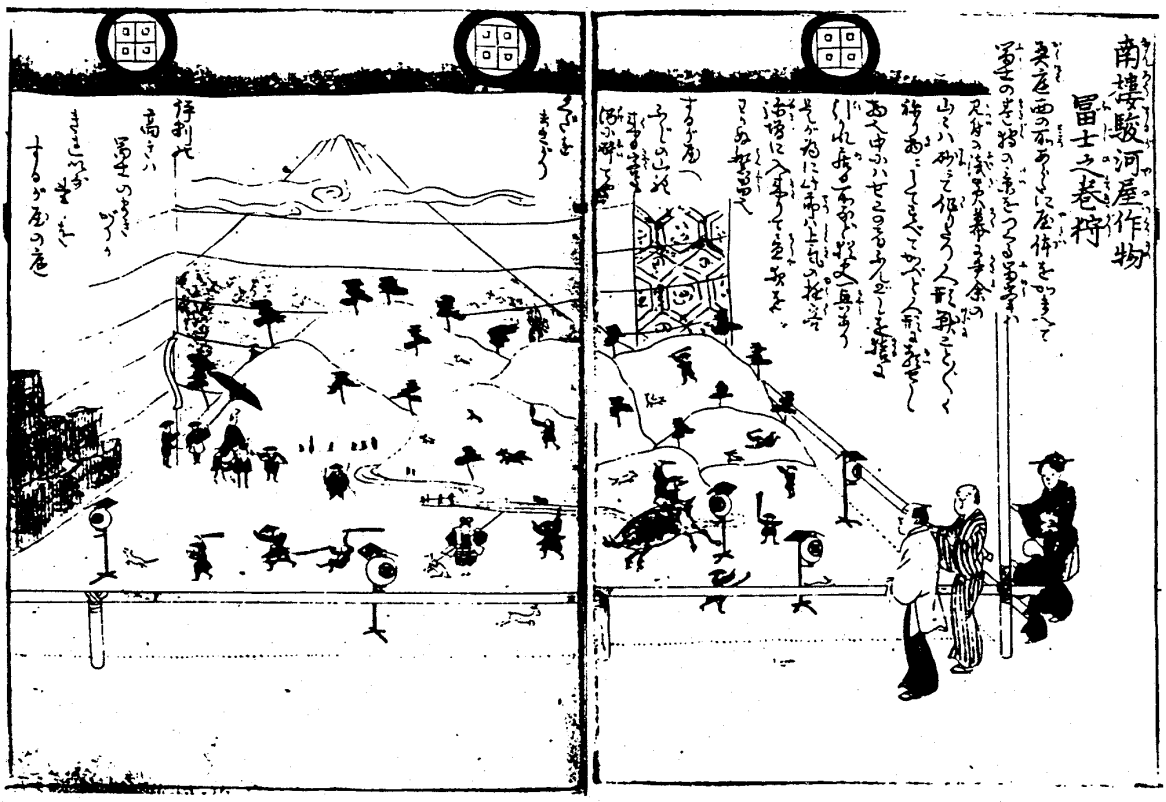

図7　〈名陽見聞図会〉富士の巻狩の細工物

（『名陽見聞図会』）

遊客を誘うための細工物ではあるが、遊客に限らず諸人に見せたと記されている。このような見世物をお目当として見物は群集したのである。

こうして列記すればきりがない。ほんの数例を抄録してみたのだが、祭礼の趣向は、見世物興行からその知恵を借りた、と考えてよかろう。神を迎えて神慮を慰める風流は、人の眼を楽しませる見世物と化す。こうして祭礼の風流は遊芸化しているのだ。天保四年五月十七日、橘町にて興行された操浄瑠璃は、馬の頭のため休演となったと『見世物雑志』を記す。休演の理由はともあれ、この記事は馬の頭祭礼そのものが盛大な見世物の観を呈していたことを示すものであろう。神を清しめる祭礼の風流は、見世物と姿をかえて人々の興を催す。この「風流の世俗化」は、今後の見世物研究の課題ともなるだろう。

（注）

（注1）愛知県教育委員会の調査（平成三年）によれば、県下における二十八件の馬の頭祭礼が報告されている（愛知県教育委員会編『愛知の民俗芸能』）。なお中日新聞（平成五年五月十七日付）は、五月十六日、大須観音で馬の塔祭礼が行われ、御輿行列が大須界隈を練り歩いたことを報じている。地域おこしとして十年ほど前に復活させたという。

（注2）守屋毅『近世芸能文化史の研究』（第二章「近世の祭礼と山車」）

（注3）愛知県下の市町村史が断片的ではあるが、〈馬の頭〉祭礼をとり

にわかもいろ〳〵にて、おとし噺あり、聲色あり、踊るあり、諷(うたふ)あり。おもひ〳〵に新しき工夫をなす事なれど、かゝる一時の興をなすに、あまり長きハわろし。今爰に画ける仁和歌などハ、作かろくみじかくして面白し。

又、おやまが金引たといふ事ハ、知る人ぞしるなれバ、詳にハいわず。

外ニげいなし。たゞところ〴〵ニて立どまりて、

〈ハア　クツシヤミ　なむさん　かねひいた　そうな

ぼて鬘を被ったむさい女形が、金壱両と書いた札を引きずっている。〈金引(かねひ)いた〉に〈風邪ひいた〉をひっかけた地口を仕形まじりに演じてみせているのだろう。ひとり芸、いわゆる流し俄である。これに類する俄は大坂で編まれた『古今俄選』（安永四年）に収められている。「非情のものにものをいはせる」俄がそれ。膏薬がくしゃみをする。

外科かうやくばこのこゝろにて、五色にそめたる頭巾を、すっぽりと着て、五人ならびゐる、病人来りてれうぢを乞ふに、かの頭巾のたれをあげ、へらにて鼻をなで、かうやくのばすに、かのかうやくはなをなでられ、「クツサメ」といひければ、医者「なむさんかぜひいた」

非情の膏薬が「クツサメ」をする。それに応じて医者が「かぜひいた」と答える。この趣向を借りてきて、ぼて鬘の女形の地口に仕立てたのである。そしてこの俄もまた見世物として若宮八幡宮の境内で興行された。同じ年天保四年の正月二十七日のこと。『見世物雑志』は、

正月末(廿七日)より、若宮境内芝居小屋前南之方にて二〇カ芝居興行、大に評判よし。

この節ニ〇カ大坂にて大ニ流行のよしにて、甲乙之番附等有レ之。

とその評判を書きとめている。いわば正月の見世物興行の評判が、すぐさま五月馬の頭祭礼の趣向に取り込まれたのである。

(5) 細工物

細工の作り物は、江戸時代後期の重要な見世物の趣向であった。朝倉無聲は「文政度は細工類見世物の全盛期で、細工名人の輩出と、もに、其興行も百五十回以上であった」[注34]と述べている。この流行は名古屋にも見られ、『見世物雑志』もたびたび細工物興行の評判を絵入りで紹介する。次のは天保四年五月五日、熱田馬の頭の折に出された細工物。この日熱田神戸町の遊廓駿河屋は、富士の巻狩の景を庭に構えて見世物とした（図7参照）。神戸町は熱田の遊里としては第一流であったという[注35]。

奥庭西の所、あらたに屋体をかまへて、富士の巻狩の景をつくる。冨峯ハ見付の浅黄幕に書。余の山々ハ砂ニて作りたり。人形・獣こと〴〵く、ねり物ニして、すべてかぶと人形に類セし物也。中にハ、せこの者ふんどしを猿に引かれ居る所など、猶更一興あり。是が為に、此節ハ上気(うわき)の遊客弥増に入来りて、昼夜をわかぬ繁昌也。

年五月十八日の馬の頭（『猿猴庵日記』）。

馬の頭少し。其内に見事なりしは、長栄寺前のうちわ燈籠と、あやめ丁の住吉おどりは、子供よくそろひ、風流おどり女子（むすめ）等までもけいごに出て、近年に珍らし。

住吉踊は本来、摂津住吉大社の御田植神事の風流踊であったが、下級芸能者の願人坊主がこれを踊って、諸国各地に流行させた。それが文政年間から名古屋でも盛んに興行された[注32]。『見世物雑志』は、清寿院境内での興行をたびたび記録している。高力猿猴庵も「これは町々を廻り、おどるものにて、摂州住吉に此一座あり。其者共集りて、此見（セ脱カ）ものをなす。おどけ狂言を仕ぐみて、おどりをする」（文政二年八月）と記す。「住吉様の岸の姫松めでたさよ千歳楽万歳楽」（『人倫訓蒙図彙』）と囃しながら踊る。おどけたしぐさが人気を博したのである。

(4) 俄

〈馬の頭仁和賀〉と称する俄狂言も見物の興を催した。

にわかじや〳〵とはやし、道すから所望すれば落し狂言をなし、或は知音（ちかづき）の所へ入て、さま〳〵の妓芸をなす。元（もと）は、よやさあ〳〵とはやせしも、今はちやうさよふといふ事になれり。

（『尾張年中行事絵抄』馬之頭仁和賀）

『猿猴庵日記』から馬の頭俄の条を少し引用してみる。

○笛太鼓すり鉦つゝみ三味線にて踊所作、俄等、種々趣向、美を盡せり（文化元年五・十八）

○翌日の札馬も囃子物を入、俄狂言或は藝をする、両日共、見物群集せり（文化四年五・十八）

○さま〳〵の妓藝をなし、夕方迄爰かしこを廻りて賑合、其外俄趣向の若者、諸方より出、群集す（文化九年・八・十九）

にぎやかに囃したてられて、俄が見物の眼を楽しませていたことがおよそ推察できる。俄は素人芸であり、即興の機知をその身上とした。素人芸とはいえ、しかし、それは神を清（すす）しめ、神慮を慰める神事と関わって生まれた。すなわち、六月大坂住吉神社御祓の祭礼から生まれた即興頓作のわざくれであった[注33]。祭礼の風流としていかにもふさわしい趣向であるといえよう。

『名陽見聞図会』は名古屋馬の頭（天保四年五月十七日）の俄の趣向を記しとどめる（図6参照）。

図6 〈名陽見聞図会〉馬の頭俄

(四) 祭礼と見世物

小寺玉晁の『見世物雑志』は、大須・広小路柳薬師・清寿院・若宮八幡などの寺社境内が、見世物興行の場として非常な賑いを見せていることを記録して興味深い。(注30) それと併せて『猿猴庵日記』を読めば、見世物興行は寺社境内に限らない、祭礼そのものが見世物の様相を呈していることが手に取るようにわかる。馬の頭祭礼もまたその一例である。

見世物研究は、資料の制約などから、研究の困難さが指摘されて久しい。(注31) それでも祭礼研究が、見世物研究の進展をはかる試みになりはしないだろうか。詳細は別稿に譲るとして、その抄録をここに記して、祭礼と見世物の交渉を探る試みとしよう。(1)操浄瑠璃・(2)曲馬・(3)住吉踊・(4)俄・(5)細工物と項目別に整理してみよう。

(1) 操浄瑠璃

天保七年五月五日、熱田馬の頭の行列に那須の巻狩の趣向が出された。

馬の頭、多かる中に、馬に尾を九ツつけて、金毛九尾の狐に見立て、皆狩人の姿に出立て、奈那の御狩のていをなせり。是は是節、若宮ニて豊竹三光斎の浄溜理(ママ)ニ、玉藻前評判よかりしかバ、夫よりおもひつきたるならんか。

(『名陽見聞図会』)

馬が金毛九尾の狐に見立てられる。玉藻前が狐の正体を顕わしたところである。若宮境内にて、四月十二日より『玉藻前旭袂』が豊竹靱太夫・三光斎らによって上演された(『見世物雑志』)。それが馬の頭祭礼に取り込まれ、滑稽な〈見立て趣向〉が演出されたのであろう。なお馬の頭の翌日六日から、同じく若宮境内で同じ靱太夫・三光斎らによって『玉藻前旭袂』が続いて演じられている。やはりこの演物(だしもの)は評判を呼んだのであろう。

(2) 曲馬

文政十一年五月十七日、この日名古屋城辰巳櫓にて、馬の頭が上覧に供された。『猿猴庵日記』も「近年にて珍しき賑合」と記して、次のように記録する。

池田町の馬の頭に、武平町の馬喰の子、熊といふ九歳なるが、曲馬を乗る。大評判。

馬上で芝居の所作事や梯子登りが演じられる。この記事は芸人の曲芸ではないのだが、このような曲馬の評判も、見世物の曲馬芸、ことに女曲馬の流行が背景にある。たとえば同年二月六日より、大須門前で女太夫の曲馬興行が行われている。『見世物雑志』は「はしご乗をいたす。立て登りてしやちほこ立して下る也」と記す。名古屋での曲馬の流行が、祭礼にも反映したことを示す記事であろう。

(3) 住吉踊

住吉踊も演物(だしもの)に取り入れられて、祭礼行列の趣向となる。文化八

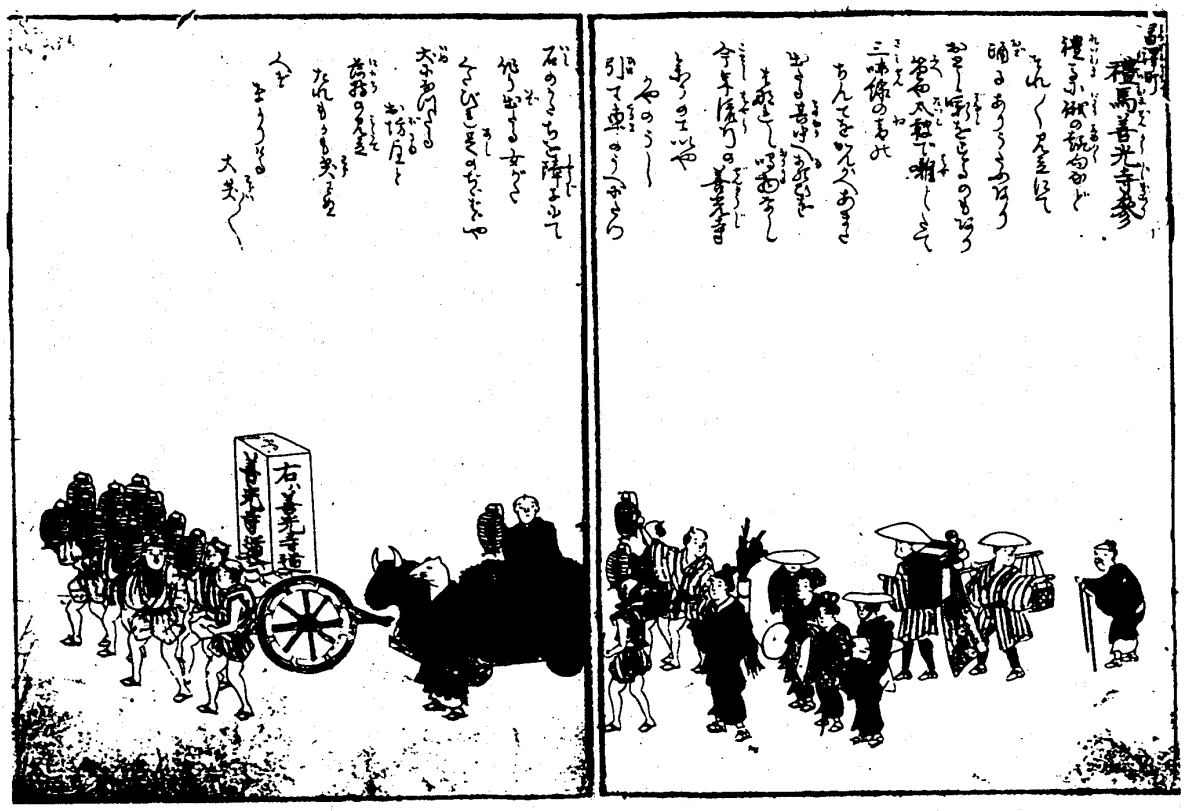

図5　〈名陽見聞図会〉熱田馬の頭　礼馬　善光寺参り

納するのだ。

神を迎えて共に遊ぶ、その神遊びの造形が造り物だと郡司氏は指摘される。それならば善光寺参りの行列もまた、巧みに演出された作り物である。それは〈見立て〉という趣向のはたらきに興じる遊び心から生まれてきたに違いない。

標具はもちろんのこと、作り物の趣向も〈馬頭宿〉と称する若者寄合宿で相談される。これは馬の頭を出す町内ごとの組織である。ここで祭礼行列の演出も工夫される。

馬の頭を出さんと催ふ町内には、其標具、作りもの、細工杯する所を定て、若き者寄合をなし、ねりもの、趣向を編み、相談する所なり。すでに馬ならしの日に至りては、漸出来上りたるを、其宿の店先にかざりて、諸人に見する也。

（『尾張年中行事絵抄』）

出来上った標具・細工物は店先に飾られて見物に供せられる。見物を意識した作り物の趣向が練られると考えていい。祭礼行列もまた見世物として趣向がこらされるのである。先に示した善光寺参りの趣向も、ここから生まれてきたのだろう。専門の職人の手によって標具はもちろん、衣裳や細工物が工夫されるのも、見世物化の風潮をさらに進めるものであろう。ならば祭礼と見世物の交渉さえ生まれてくる。

○西国三十三所囲拝の趣向一群
○八丈縞片身ツヽ續分の浴衣一群
○裸参りの趣向一群是甚奇才也

（『青窓紀聞』[注28]）

具体的な趣向立ては明らかではないが、祭礼にふさわしく寺社参詣の趣向が人気呼んでいたようだ。祭礼にさまざまな作り物が工夫されるように、行列自体が作り物の風流として、趣向がこらされるのである。「甚奇才」と評されるように目を奪うような奇抜な趣向が用意される。そしてお練り（行列）もまた作り物として演出され、そのまま風流と化す。笛・太鼓あるいは三味線にうち囃されて行列は進む。次は大須馬の頭の行列（文政四年五月十八日）。

又、橘町裏上ノ切よりは、屋体の有る小車に、はまぐりの大なるが、上橘裏の三字を吹出したる所を作りものにして、大勢両つなにて引跡、けいご（警固）はやしものをする。先、子供けいご数多、貝取の出立、きれいなりし。又、日用方寄合連中の馬は、善光寺参りの趣向にて、先の印の箱祓には、善光寺道の手引石に見立て、若き者、先けいごは、各、白きひとへ物に、善光寺への道中記に見立、一人を一駅にして、墨画の風景をあらはし、小牧より善光寺迄其次に、参詣の旅人一様に、紺のひとへものに赤き文字の紋所をつける。其中に三方かうじんの作り馬に乗たるぢゞとばゞの姿なりて、ねむり行さまあり、標具は大なる善光寺籠九尺ばかりにて、後より、うたをうたふ。其外、唐人おどり、蛇おどり等数品、繁多なれば、くわしく不誌。

（『猿猴庵日記』）

蛤の造り物ばかりではなく、行列そのものが風流として作りたてられている。善光寺参りの〈見立て趣向〉である。善光寺までの道中が道中記よろしく、それも「墨画の風景」として見立てられる。随分と凝った趣向である。三宝荒神に乗って居眠りする爺と婆の見立て姿さえ作られている。いわば〈見立て趣向〉に遊んでいるのだ。小田切春江の『名陽見聞図会』は熱田馬の頭（天保三年五月十八日）、冨沢町より出た礼馬〈善光寺参〉の趣向を記録する（図5参照）。

今年流行の善光寺参りのていや、かやのうし（蚊帳牛）、引て車のうへに立つ。石のかたちを障子にて作り、出たる女がた、くたびれ足の、ぢゞばゞや、犬になったるお坊様と、荷持の見立、たれもかれも、笑わぬ人ぞなかりける。大笑〳〵。

爺婆はもちろん、善光寺に由縁の深い、牛・石・犬が作りたてられる。石は手引石、犬は戒壇廻りの伝承を有する。すなわち放辟邪侈の人が戒壇廻りをすれば犬になるという俗説による（『善光寺道名所図会』）。それらが蚊帳や障子で作られて〈見立て趣向〉に興じている。それは笑いを誘う「俄の趣向」であり、「それ〴〵見立にて踊るあり、うたふあり。おとし噺するものもあり」というにぎやかな行列であった。このような趣向の遊びに、神を迎える祭の日の〈風流の精神〉が生きている。郡司正勝氏は、かつて〈風流〉を論じて次のように述べられた[注29]。

神を迎える祭の日には、人々は精一ぱいに趣向を「見立て」て、造り物をして、あっと云わせる。神はこれを「風流」として受

の矢〉は〈鏑矢〉に通ずるに違いない。こうした判じ物の標具に笑い興じる見物の姿を高力猿猴庵の筆は描いている。飾りたてられる風流のいきつくところ、作り物にも遊び心が表現される。神聖な標具さえ見世物と化すのだ。

もちろん遊びとはいえ、この標具にも豊穣を祈る心は託されている。巨大な蕪大根と魚を獲る鵜は、そのまま五穀豊穣の祈願に通ずる。このようにして豊穣を祈る作り物の標具は、一方では遊び心を表現して、神のみならず見物の眼をも楽しませる。いわば見世物としても標具は作りたてられるのだ。ここに近世の風流の姿を見ることができよう。

(三) 祭礼行列の趣向

標具ばかりではなく、練物(ねりもの)、すなわち祭礼行列にも風流はさまざまに尽くされる。豪奢な衣裳もそのひとつであろう。馬の頭祭礼を記録するさまざまな資料が、その綾羅錦繡の過差を伝える。たびたび華美な衣裳の制禁さえ出されている。そこには「絢爛たる異様」、すなわち中世の「傾奇(かぶき)」にも通ずる風流の伝統が脈打っているといえよう。(注26)

子供の出立さま〴〵に美麗を盡せし其中に、取分目立しハ上の切とかや。各一様に出立、銀水色の半天(はんてん)に金魚に流水の模様、下にハ朱の襦袢を着ていと艶也し。其外種々の花美風流画に不遑語に不盡、餘多の児輩連れる粧ひ、四時の草花を籠につかねて見るが如く、西の切なる子供の出立こそ勝れたれ……

(『名府所々開帳録』(注27))

これは名古屋馬の頭(五月十八日)の祭礼衣裳である。このような華麗な衣裳で装って練り歩くこと、それも風流のわざであった。そして衣裳はもちろん、標具の意匠も専門の職人に制作が依頼されることもあった。

其きものハ白に貝づくしの模様を画く、是ハだしの細工競子(けいご)衣裳の模様ともに当町の住春園が手に出たれば、当時名高き画工の彩色故、格別に見えよくて、他に勝れぬ。

(『猿猴庵日記』文化九年五月十八日)

職人の意匠ゆえに、ことさらその技と華美は競われたに違いない。風流を尽くした豪奢な衣裳が祭礼の興を盛んにするのならば、お練(ね)りもまた趣向をこらしたものとなる。文化元年、熱田馬の頭の記録は、次のような趣向を伝えている。

○黒天鵞絨(びろうど)半天揃二十人程
○俄馬三井寺鐘供養の趣向三十人程
○大薬師鬼祭の趣向一群
○猩々の趣向一群
○鐘馗　鬼駈の趣向一群
○浴衣参の趣向一群
○伊勢まいり一群
○奴の趣向一群
○金比羅同者一群

らない。「尾張からくり」と呼ばれる、からくり人形の宝庫にふさわしい風流(注24)。それがこの佐夜姫の標具である。

しかし神秘なる標具とはいえ、からくり仕掛けの佐夜姫人形は、見物の眼を驚かせんとする趣向がある。もちろんそれが風流の本質ではあるが、神を清しめる遊びとはいえ、見物を意識した遊び心から、さまざまな趣向が生まれてくる。大須観音馬の頭にもその工夫はあらわれている。いずれの在町も趣向をこらした標具を馬に飾りつけて行列する。

取分堀川の西、広井郷裏町と呼ぶ地は、人数もおほく、趣向思ひつき殊によろしく、尤・馬の前へ、ねりもの、類、さま〴〵の観を出す事、年々歳々に替りて、珍しきを専とす。但し其馬に飾れる標具は、昔より定りありて、中橋裏は小鳥落、屋体のうちに、小鳥の作りもの、小鳥籠・さし竿抔もある由。いずれにも小鳥落は久敷不出故、予いまだ一見せず。小鳥を取るていなりと。猶古老の説を可尋。伝馬橋裏は、花車、何れも所の字となれり。或は下納屋裏は菜矢鵜といふはんじ物、内屋敷は蘇鉄、中之切は宝珠、祢宜町は大福帳、上畠裏新長屋は影廻し、其外猶おほし。

（『尾張年中行事絵抄』）

標具が町村を代表するものとして重視されたことは先に触れた。だから町村の象徴として、さまざまな工夫と趣向がこらされたと言っていい(注25)。たとえば下納屋裏は、遊び心溢れる標具を作ってみせた。〈菜矢鵜〉の標具である（図4参照）。巨大な蕪大根に矢が挿され、鵜が魚をくわえて立つ。〈菜矢鵜〉に納屋裏を通わせた地口（駄洒落）の遊びであり、「判じ物」である。謎かけの遊びだ。さらに〈蕪

図4　〈尾張年中行事絵抄〉菜矢鵜の標具

（杓）は神霊の宿るものとされ、神楽の採物のひとつにも使われた。[注23]それはまた水の神を迎え祀るものとして、水神信仰とも深い関わりを有する。この神聖な瓢箪が金銀に装われるところにも、標具の風流化は認められる。神はこうして風流を尽くして迎えられねばならないのだろう。

標具の風流を考える場合、甚目寺馬の頭もまた注目される。この寺の縁起も水に関わる。漁夫の網にかかって拾われたという紫金の観音を本尊とするのだ。文政八年五月十八日の馬の頭には佐夜姫の標具が今宿村から出された（図3参照）。これはからくり人形の標具である。

図3　〈猿猴庵日記〉佐夜姫の標具

十八日。馬の頭。海東郡今宿村佐与姫のだし、甚目寺へ出す。是は人形からくりありて、古雅なるだしにて、折々は出す。百年目に出るといふ説あり、いかゝ。相伝ふ、此人形は生か入てあり、常々は村の寺の天井に、長持へ入て納置由。彼人形、ことしは出度と思ふ時は春より長持の中、めり〳〵といふ音してさわがし。其告にまかせて、其歳、是を出す。此だしをかければ、大雨有といふ。ことしも、俄雨降。実に一奇事也。

（『猿猴庵日記』）

いかにも標具の神秘性を語る伝承を伴っている。この標具に寄せられた強い雨乞への期待を語りつぐものであろう。この人形のからくり仕掛けについては『尾張年中行事絵抄』がさらに詳しく記録している。

今宿村に佐夜姫の標具とて、女の人形居たり。これは犠とて、人神御供にそなへたるさまなり。前に浪の作ものあり、大蛇出て姫を呑んとす、人形、経文を読ていをなす、大蛇恐れて浪に入るからくりあり。かの女の人形は、甚古物にして、名作なる由。この標具を出せば、大雨ふると語伝へて、近年は出す事なし。其村の寺に、秘蔵して霊宝のごとく長持に入て、堂の天井の裏に籠ありとぞ

佐夜姫はもちろん『竹生島の本地』『まつら長者』が伝えるところの松浦佐用姫。水の神（大蛇）の犠となる彼女が、法華経の功徳で助かり、彼に近江国竹生島の弁才天と現われる語り物である。からくりは大蛇の人身御供にそなえられた佐夜姫が、法華経を読誦する条りを仕掛ける。かかる竜神信仰とも結びつく人形標具ゆえ、その大なる功徳、すなわち降雨も期待されるのである。神を迎えての祈願であるならば、標具も趣向を凝らして風流が尽くされねばな

し龍泉寺のそれを除き、明治以降、他の三観音馬の頭は行われていないという。(注19)

興味深いことに、尾張四観音はそれぞれに水に関わる縁起を有する。たとえば龍泉寺の縁起によれば、延暦年中、最澄が熱田社に参籠して修法している時、竜神の告げによってこの地に来たり、多羅々ケ池（多々羅ケ池）より出現した馬頭観音の像を安置した堂を建立したのが始まりと伝える（『尾張年中行事絵抄』(注20)）。この馬頭観音を本尊とする当寺について『沙石集』は次のように記している。やはり竜神の造立された旨を伝えるのである。

尾張國龍山(泉)寺ハ、昔、龍王ノ一夜ノ中ニ造立供養セル寺也。夜ノ明ケレバ、堀ヲバホリサシタリトテ、當時モ其跡見ヘ侍リ。馬頭観音ニテオワシマス。霊仏トテ、人コゾリケリ。月詣シテ、十八日ゴトニ観音経卅三巻讀ミ奉ケル。

このように竜神信仰と結びつく縁起を有する当寺はまた、熱田神宮の奥の院とも称され、弘法大師が熱田参籠の時、この山に詣でたとも伝えられている（『尾張年中行事絵抄』）。走馬（馬の頭）の記録もまた熱田神宮との結びつきを語る。

又今日走馬を出す。同郡下津尾村を一番とす。此日下津尾の村民堂に集る。是は中世当時荒廃の時、下津尾より燈明棒ゲ奉仕したる故とかや。行者梵天と名づけ長竿に幣をつけ二本持、一本は熱田、一本は観音と云。

（『尾張年中行事絵抄』）

龍泉寺が、熱田社との結びつきを語る意味を、いま明らめることはできない。熱田の奥の院と説いた修験の関与が考えられるのだろうか。それはともかく走馬（馬の頭）が献ぜられて、雨乞の修法が行われる。

吉田寺（筆者注：當寺の誤写か）の重宝に宝劔幷に龍宮より上りし雨壺あり。旱魃には此壺に多羅々か渕の水を湛へ加持するに必奇特あり。然に往□□兵燹に惟て惜むべし焼失しぬ。今はあらぬ瀬戸焼の壺を雨壺と称し請雨の祈に、此壺に多羅々か渕の水を盛て請雨経を読誦し加持すれば霊験いちじるしとて、旱天には諸民走馬を牽て堂前をめぐり請雨の法を修せば感応有り。

（『尾張年中行事絵抄』）

雨壺の伝承は竜神信仰と結びついて、広く全国に分布する(注21)。多羅々ケ池の神水をたたえた雨壺は、おそらく雨乞修法の呪具であろう。かくして農作の豊穣を祈って、五月十八日の馬の頭には、飾り馬が献ぜられることとなる。それは人馬ともに着飾った風流の行列であった。

注目すべきはやはり鞍に置かれる標具である。それは神を招く依代であり、かつ風流の飾りものとなる。龍泉寺馬の頭の標示について見れば、たとえば瓢箪と水杓子のそれがある(注22)。瓢箪の標具は吉根合宿から出され、金銀の二組がある。水杓子のそれは、大森合宿から出され、馬杓子・底ぬけ杓子と呼ばれている。瓢箪・杓子は水の容器であり、かつ雨乞の呪具・その象徴(シンボル)であろう。それは先の龍宮の雨壺に類する神水をたたえる神器と考えられよう。古くから瓢(ひさご)

深くかかわっている。

龍神ノ社　社説、一座吉備ノ武彦ノ命

按ズルニ　往古此ノ祠ナキ歟、蓋シ此ノ東ニ清水ノ社アリ、習合家ノ説ニ、泉水涌出ノ地ナル故ヘ龍神ヲ祭ルト、此ノ説近キ歟、凡ソ密家請雨経ノ法ヲ行フ時、輪蓋龍王ヲ祭ル、又善女龍王ヲモ祭ル、此ノ祠ハ蓋シ空海ノ所レ立ツル歟、

（『熱田神宮問答雑録』）[注16]

龍王を祀る清水社の前で、雨乞の修法が行われたのである。そして龍神社もまた当然のごとく弘法大師伝説を抱えている。次は龍神社建立の由来である。

或説ニ昔弘法大師神泉苑ニテ雨ヲ祈ラレケル時天竺阿耨達池ノ善女龍王ヲ請セラレ行法畢リテ竜王ハ東ヲ指テ飛去給フ其時此社ノ内エ入給フ故ニ名付タリトナン

（『張州雑志』）

弘法大師かつて神泉苑で雨乞修法の時、善女龍王がこの熱田の社へ飛び来たった。そのゆえにこの龍神社は建立されたというのだ。『猿猴庵日記』がたびたび記すごとく、雨乞祈願がしきりに熱田神宮にかけられるのも、摂社龍神社・清水社の竜神信仰と密接に結びつくにからに相違ない。水の神の化身龍神に馬は献ぜられるのである。[注17]

熱田神宮の馬頭会に用いられる鞍にまつわる伝承は、馬頭会と雨乞儀礼との関わりを示して興味深い。この鞍が神宝中の随一として崇められるという記述もおもしろい。

此日（注：馬頭会）、両頭人の馬に居ける鞍は、尊神の、東夷を亡し給ひし時に用ひさせ給ふ所の御鞍にして、当宮の神宝の随一たり。然れども、頭人より来年の頭人へ、順々に伝ふ事故（ゆへ）、其年々の頭人の宅に有れば、神庫（みくら）に納（をさむ）る間なし。大旱の時、頭人へ雨乞を祈願すれば、此鞍にむかひて頭人、祈雨の秘法をなす。忽に雨ふる事、速なりといへり。

（『尾張年中行事絵抄』）

その年の馬頭会の当番役である頭人が、この鞍に雨乞祈願すれば、たちまちにして雨降るというのだ。この鞍は日本武尊が東夷征伐の折に用いたという古伝が存在する。[注18]

以上の挙例からすれば、馬の頭は熱田神宮の馬頭会にその起源を有すると考えられる。神幸祭に神を迎えて行われる競馬は、その年の農作物の豊凶を占う神事であった。それは五穀豊穣を願う神事である故に、雨乞祈願も行われたと推される。豊穣を祈るにあたって、水神の呪能は、さらに期待されたのである。こうして神幸祭に臨んで、神を迎える馬は飾りたてられ、風流を尽くした作り物が用意されるのだ。馬上に置かれる神の依代・標具もその例に漏れない。

(二)　標具の風流

甚目寺（真言宗・甚目寺町）荒子観音（天台宗・中川区）笠寺観音（真言宗・南区）龍泉寺（天台宗・守山区）は尾張四観音と称され、観音の縁日、五月十八日にいずれも馬の頭が献ぜられた。しか

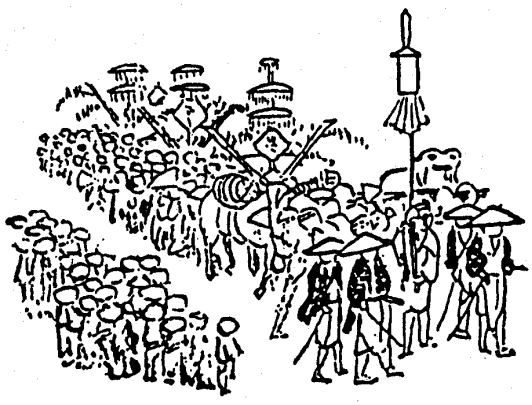

図2　〈猿猴庵日記〉二階笠、雨蛙の標具

供や若者が棒・長刀を手にして従う。飾りたてられた馬の鞍にはさまざまな作り物、いわゆる標具（だし）が乗せられる。これが神の依代（よりしろ）となる。従って標具は村を代表するものとして重視され、古例通りに作ることが要求されたという。[注11]「其所々に定有て之を用ふ」と記される所以だ。以下の論もこの標具に注目しながら進めていきたい。それが風流を論ずる重要な視点となるだろう。神の依代として重視されるゆえに、標具はさまざまな工夫・趣向をこらして作りたてられることになる。そこに風流を論ずる課題はある。

それはともかく論述を馬の頭と農耕儀礼との関連に戻そう。雨乞儀礼が当面の課題となる。文政四年五月十五日、熱田神宮へ馬の頭が献ぜられた。前述のように五日が熱田馬の頭祭礼なのだが、大旱（ひでり）のため雨乞が行われ、馬の頭が出されたのである（図2参照）。

此頃、大旱にて、雨乞、諸所へかゝる。十五日・十六日・十七日は諸村々・府下よりも馬の頭出る。今日は、広井村（上畠表より下納屋・水主町）不残（ま）、熱田宮へかゝる。馬数十五疋、人数七千人余といふ。近年の珍事なり。惣じてことしは熱田へかける馬の頭多かりし。小牧辺の村々、高田寺村等、五ケ所より、本町通りを通行す。又十六日には、上米野・中野・高畑・大秋・中島村等より馬を献ず。各、うたひ馬なり。二かい笠・あまかへるのだし有。前夜より、此日雨ふりたれば、直に礼馬をかねるといふ。

○先へ印箱、祓の正面に広井之里とあり、よこに嘉穀熟然。

○あまかへるの作り物を釣行。

○馬三疋（祢宜丁八切新屋敷）標具一様二かい笠（へりにかすみの たけ長をつけ）先馬にはあまかへるを乗す。

○跡よりはだか馬、数々有。

（『猿猴庵日記』文政四年）

雨乞祈願のため馬の頭が献ぜられる。[注12]「うたひ馬なり」とあるのは、おそらくうたい囃されて祭の行列は進められたのであろう。[注13]二階笠（蓋）の標具はもちろん神の依代である。神を迎える風流の作り物だ。ここに神は降臨される。雨蛙の標具もまた雨乞祈願にふさわしい風流であろう。その甲斐あってか、すみやかに雨は降り、礼馬も献ぜられた。熱田の神は神徳を示されたのである。古代、朝廷の雨乞に大和の丹生川上社と山城の貴船社に馬を献ずる行事のあったことはよく知られている。[注14]炎旱には黒馬を献じて雨を請い、霖雨には白馬を献じて晴を祈る神事である。熱田馬の頭祭礼も、こうした献馬の伝統を承けるものであろう。そしてその根底には五穀豊穣の願いがあることはもちろんだ。〈嘉穀熟然〉と記された祓の札がよくそれを示していよう。[注15]

五穀豊穣の雨乞祈願が、熱田神宮にかけられるのは、以下の理由による。摂社龍神社・清水社を有する熱田神宮はまた竜神信仰とも

図1　〈尾張年中行事絵抄〉熱田宮　馬頭会　場ならし

いま神幸祭の次第は略す。壮厳な管絃に従って神は迎えられる。もちろん神馬とは神の乗り物である。(注10)そして神の来ませる場で競馬は行われる。それは国家の平穏と五穀の豊穣とを祈念する重要な神事（神幸祭）の一環であった。その折、競馬によって、その年の豊凶を人々は占ったのである。この日、早朝より熱田の町はもちろん、近郷近在の村々から飾りたてられた馬が献ぜられる。ならば馬の頭とは、農耕儀礼と密接に結びついた祭礼であることは、およそ推察できるだろう。

それならば献馬のさまを窺ってみよう。神を迎えるために、行列する人馬ともに着飾った風流のいでたちである（図1参照）。

此馬の頭に、二つの品あり。箱祓の形に、町所の名を誌したるを竿の先に付て、真先に持行く。（これを印持といふ。其出立風流なり。）次に児輩数多棒を持行く。（これを棒の手といふ。）次に壮士大勢、長刀をかづき行く。（出立さま〈花美を尽す。）其後より馬には皆具の飾をして、鞍の上に種々の作物を乗たり。（是を標具と号て其所々に定有て用之。）馬の跡には長き綱を付て、幼童に是を引かしむ。これを本馬と称す。又、裸馬に新薦を巻て、剣祓を付て跡綱をひかへ行もの、各風流異形に出立て一さんに騙らかすを、俄馬と呼ぶ也。（中略）此日其町内を牽て、町々諸方を行列して熱田郷の内を廻り、一之鳥居の少し北、佐屋街道の辺迄来りて、宮地に帰る事なり。

（『尾張年中行事絵抄』）

本馬と俄馬、その形態の別はあるものの、いずれもその風流のいでたちが言いたてられている。本馬には神馬を警固するように、子

張文人たちが、郷土の歳時記録を残してくれている。たとえば『猿猴庵日記』や『尾張年中行事絵抄』、あるいは小田切春江『名陽見聞図会』は格好の資料を提供してくれる。[注4] そこに描かれた挿絵もまた、かつての祭事を知る画証となりうる。それらの郷土史料に従って、近世の風流を論じてみよう。

(一) 熱田馬の頭

一九八一年(昭和五十六年)十一月十四日からほぼ一ケ月にわたって、「馬の塔と棒の手」なる部門展が名古屋博物館において開催された。その折に博物館が編んだ図録に従って馬の頭祭礼の概要を示そう。[注5] ただし棒の手(棒術)もまた祭礼と関わるのだが、ここでは論考の対象としない。[注6] なお馬の塔とも記されるのだが、ここでは馬の頭と記して論述をすすめる。

馬の塔はかつて尾張・西三河で行われた代表的祭礼習俗のひとつで、標具(ダシ)と呼ばれる札や御幣を立て、豪華な馬具で飾った馬を社寺へ奉献するものである。馬の頭とも書き、オマント・オマントウといっている。馬を担当した頭人(馬頭人)から来た言葉であるらしい。村の氏神の祭りにはもちろん、降雨祈願の成就御礼や遷宮祭にも出された。(中略)合宿(合属ガッシュク・カシク、ガッショク)と称して数十ケ村が連合し、熱田神宮(熱田区)、龍泉寺(守山区)、猿投神社(豊田市)など特定の社寺へ献馬することも盛んに行われた。

村々の連合による盛大な祭礼がおよそ推察できる。要するに社寺への献馬奉納の祭礼である。献馬の起源を語る伝説もあるが、いまはそれに触れる余裕はない。[注7] 伝説はともかく、この献馬の起源は、熱田神宮の競馬の行事に求められるのが通説である。[注8] 熱田神宮の競馬は、農耕の開始に際して、その年の作柄の豊凶を占う年占の競戯であった。[注9] いわば競馬の勝ち負けによって、神慮が占われ、作柄の豊凶が決められたのだ。それならば熱田神宮の神幸祭・馬頭会について少しく言及しておかねばなるまい。馬の頭なる名称も、この馬頭会に由来するものであろう。

五月五日、神幸祭に神を迎えて競馬は行われる。

五日、熱田宮神幸、馬頭会。辰刻、両宮進饌。巳刻、鎮皇門の閣上へ神供を献じ、神人並居て祝詞を読等の式あり。此日早朝より近郷の馬頭を牽く、其在々の馬帰りて後、熱田地町々の馬頭をひくなり。未刻に神輿を出し奉るに、拝殿、勅使殿の内を渡御、海蔵門を経て西へ神幸路を神幸なしまいらせて、鎮皇門の閣上に登り、さま〳〵の式有なり。其行粧殊厳重なり。焼夫は神鉾を持て真先に進み、次に神馬(其飾甚古雅なるさまなり。)を牽く。楽人は道すがら音楽を奏し、中臈の神輩は神宝を採りて供奉す。祝部座は神輿を釣奉り、喜奴笠を左右にさしかけたり。(中略)亦両頭人政所に至り、爰より馬上にて鎮皇門の前を行列す。これを頭人の馬場渡といふ。前に誌せし競馬は、此時にありて、神輿の御前にて勤し事の由。依之馬場渡の名残れりとぞ。

(『尾張年中行事絵抄』)

馬の頭の風流

――祭礼と見世物と――

小林幸夫

はじめに

馬の頭は尾張の祭礼民俗であった。いや過去形で語るのは正確ではない。わずかではあるが、現在でもその祭事は執り行なわれている。[注1] しかし馬が我々の日常生活から縁遠くなった現今では、かつての盛大な祭礼の面影などとどめてはいないようだ。祭礼から馬は姿を消して、御輿が代用されているとの報告もある。農耕馬が数少なくなって、祭の維持が困難になっているのだ。もちろん理由はそれだけではないのだが、ともかく馬の頭祭礼は確実に我々の前から姿を消しつつある。

この祭礼習俗を通して、本稿では〈風流（ふりゆう）〉について論じてみたい。もちろん祭礼と風流の連関は、なにも馬の頭に限った課題ではない。風流は中世から近世へと至る祭事芸能が抱える大きな研究課題であると言っていい。そのなかで尾張の馬の頭を論じる本稿はどのように位置づけられるか。いまは次のように答えておこう。馬の頭祭礼は殊に、中世から近世への、風流の変容を語る場合、格好の材料を提供してくれると。結論を先取りするならば、祭礼が見世物として造りたてられていく。さまざまな趣向がこらされて、祭礼が見世物の様相を呈してくる。それは守屋毅氏の言葉を借りれば、「風流の世俗化」とも言い換えられよう。[注2] そんな近世風流の様相は、しかし、〈飾りたてる・造りたてる〉という風流の本質が生み出した変容の姿であった。尾張馬の頭を通して、その変容のさまを窺い知ることができる。しかしここで論及するのは変容の過程ではない。近世の風流・風流の世俗化をささえた〈見立て趣向〉に説き及びたい。そのためには見世物興行との関連にも注目しなければなるまい。そうすれば祭礼と遊楽の具体相が見てとれるのではないか。したがってまず祭礼信仰を論ずることからはじめねばなるまい。

さいわいに数こそ少ないが、郷土の史家の手になる研究も備わっている。[注3] そしてなによりも猿猴庵高力種信をはじめとする江戸期尾